

!!!! 今月の SpotLIGHT

嘉手納基地で働く様々な職種の日本人従業員にスポットをあてて毎月紹介していくコーナーです。今月はこの方です。



第18航空団広報局
制作室写真部
きんじょう
金城 順子さん
じゅんこ



JUNKO KINJO

Q1. あなたの職種と仕事の内容をお聞かせ下さい。

職種はフォトグラファーです。撮影するのは、スタジオポートレート（軍人の公用写真）、パスポート用の写真、交通事故現場等の記録写真、指定された場所に行って撮影をするロケーション撮影—例えば、司令官交代式、引退式、軍人学校卒業式、各種の受賞式、その他、任務 運用に関連する様々な行事や活動等があります。内容に由っては、日本人従業員も撮りますが、撮影の対象となるのは殆

んどが軍人 軍属の方々です。また、撮影以外では、フロントデスクでの受付・接客等も行います。この場合、撮影のスケジュールを組んだり、仕事の依頼書類の作成・データベースへの入力等が主な仕事です。



(写真: チャーリード・ウォーレン等撮影)

Q2. この職場に勤めてどのくらいですか？職場の雰囲気も含めてお聞かせ下さい。

OCTOBER 2009

約三年です。以前は民間会社で勤めていたので、この職場が基地内で働く最初の職場です。現在、写真部のスタッフは全部で5人。私以外は全て軍人です。写真部の他に、ビデオ、ニュース、報道部、渉外部があり、軍人・日本人スタッフ混合でとてもアットホームな雰囲気です。技術的な情報を交換しあったり、趣味の話をしたりと、毎日楽しく働いています。



(写真: 米空軍333点撮影)

Q3. 軍の仕事で民間とは違うな、と感じたことは？

民間の会社等と比べると、始・終業時間が早い事です。基地内では、職種や部署によっても違うのですが、午後午前7時半から午後4時半までというのが基本就労時間となっています。私の場合もその時間帯ですが、撮影によつては、ごく稀に早朝5時、6時に出勤という事もあります。勤務して間もない頃は、朝がものすごく早いと思ったのですが、今では全く気にならなくなりました。それから、時々、上司や同僚がドーナツを差し入れてくれるのですが、その種類の豊富さと量には感激しました。とてもアメリカンで好きです。もちろん、おいしいですよ。



Q4. 仕事をする上で困った事などがあれば…

階級や部隊名 所属群などを覚えるのは大変でした。それから、嘉手納基地は想像していた以上に広いので、地図と建物の番号のみで指定された場所にたどり着くのは今でも手間どう上に、リクエスターと連絡が取れない事もあって、代わりの人を探し出すのには苦労します。

(米空軍: ラキーシャ・クローリー二等軍曹撮影)

Q5. 仕事にやり甲斐を感じるのはどういう時ですか？

お客様を相手の仕事をしているので、写真の出来 サービスの内容などに感謝の言葉とともに、良い評価をいただいた時はモチベーションがあがります。また、この間、*4期毎の優秀従業員賞をいただきました。これは、まず、上司からの推薦がなければ候補にすらならないのですが、賞をいただいたという事は上司が高く評価してくれたという事なので、とても励みになりますし、嬉しかったです。



* 4期毎の優秀従業員賞（クウォーターイー アワード）：1年を4期に分けて、1期ごとにそれぞれの部隊で各部門ごとの優秀者を選び、表彰します。各受賞者は更に上のレベル（全部隊）で競います。

Q6. 同じ職種に就こうと考えている方へアドバイスがあれば、お聞かせ下さい。

撮影スキルも含めて写真に関する知識はもちろんですが、仕事を進める上で、お客様に限らず上司や同僚との細かな打ち合わせや連絡・確認という作業がとても重要なので、英語力は高いレベルで身につけておいた方が良いと思います。

SpotLIGHT

!!!! 今月の SpotLIGHT



農耕者、基地でルーツを辿る Tacit Farmers Return to Their Roots at Air Base

第18航空団広報局 レイ・ラモン1等軍曹



第2次世界大戦の影響で、沖縄の人々は厳しい生活を送っていた。ある人にとっては、子供時代の楽しかった思い出をたたつ一つ思い起こすことさえ難しいほどに。

濱元朝成さんが13歳の時、十分な教育を受けられず、兵士として訓練され、学校では戦車を停止させる方法を学んだ少年だった。彼の父親は農民としての生活、妻と8人の子、そして少しばかりの貯えを残して戦争に赴いた。

成人すると、濱元さんは嘉手納基地にあるBX（小売店）で働き始めた。父親が亡くなったとき、彼と妻のツイ子さんは後に最良と振り返る決断をし、自らの原点に戻った。それは、沖縄に欠かせない産業であるといわれる農業である。ただし、今回は嘉手納基地内の耕作になるが。

嘉手納基地やその他沖縄にある米軍基地では、いわゆる「黙認耕作」として、米軍と地元首長の合意の下、日本政府が借り受けて米軍が管理する土地において農業従事者が作物を育て収穫することが認められている。

嘉手納基地の弾薬庫地区では、嘉手納町、北谷町、読谷村からあよそ700人の黙認耕作者を受け入れている。彼らは、丘に囲まれ昔からの風景を残す90エーカー（約364000m²）ほどの土地で働いている。ライム（シーコワーサー）、みかん、マンゴー、パパイヤ、ゴーヤー、冬瓜、ヘチマ、ジャガイモ、茶の木、パイナップル、サトウキビなどが育っている。嘉手納基地で収穫されるサトウキビ量は県で3位を占める。

濱元夫妻は1971年に農業を始めた。当時彼は40歳、妻は彼より数歳年下であった。夫妻は、弾薬庫地区にフェンスが無かったころを覚えている。その頃は米軍のパトロールにもかかわらず、作物がしばしば無くなることがあった。過ぎ行く年月のなかで変わるものもあった。現在では弾薬庫地区はフェンスで囲まれ、厳重に保護されている。農作業を続けるために通行許可証が必要となつたが、夫妻は歓迎している。

「厳重な警備のおかげで、農作物の盗難の心配がなくなりました」と話すのは濱元夫人。夫妻は安心して作業に取り組めると口をそろえる。

（次ページへ続く）

TACIT FARMERS
RETURN TO THEIR
ROOTS AT AIR BASE

（記事の写真全て、米空軍レイ・ラモン1等軍曹撮影）



農作業の合間に、木陰でひと休みする濱元朝成・ツイ子さんご夫妻



TACIT FARMERS RETURN TO THEIR ROOTS AT AIR BASE

農耕者、基地でルーツを辿る



(前ページより続き)

農家と海外の米軍基地との円満な関係に驚く人もいるが、それがみられるのは嘉手納基地だけのようだ。

「ほとんどの農業従事者は地主から許可をもらって作物を育て、収入を得ている」と第18弾薬中隊MLC総班長の比嘉フロイドさんは話す。また、地主が自分の土地の一部を使って農業をし、使用しない土地を他の黙認耕作者に貸して収入を得ることもあるという。

第18弾薬中隊警備担当ジェリー・トーレズ2等軍曹は「必要に応じて耕作者が弾薬地区に入れるよう26番ゲート（ファーマーズゲート）を数日間から最大6ヶ月間開けることがある」と話し、「耕作者の方々にも作業期間中、守っていただき基地運用規定を設けている」と話した。

弾薬庫地区での黙認耕作は、生活収入をもたらすだけではなく、健康的なライフスタイルを促進する。黙認耕作者の一人、宮田清さんは、農業のおかげで豊かな生活を送れると話した。第400弾薬整備中隊（現第18弾薬中隊）で40年間勤めて退職して以来、同地区で20年間農業を続けている。

宮田さんは「定年を迎えて後、自分に合った健康的な生活を送ろうと考えて農業を始めた」と話し、「年を重ねた人間に与えられた恩恵のひとつだ」と話した。

宮田さんや濱元さんのように、大多数の黙認耕作者が困難な時代を生き抜いた人々である。彼らは、鎌などの単純な道具で刈り入れをする。夏には暑い風が吹き、汗と赤土で服にはしみができる。顔は日々照り付ける太陽で黒くなるが、畑の作業は活気に満ちている。時々頭上を飛ぶ軍用機の音や時々通りかかる軍人に、まったく気づいていないかのように彼らはひたすら働き続ける。

日没には作業を終えて、二つの世界を隔ててそびえるフェンスを通り過ぎ家路へと向かう。フェンスの外に住む耕作者たちは、作物が基地の中で安全に保護されていることに安らぐ。明日は作業の続きを取り掛かり、栽培作物に専念するが、それはひょっとすると彼ら自身の活力につながっているのかもしれない。



農耕者、基地でルーツを辿る：

記事と写真、第18航空団広報局 レイ・ラモン1等軍曹